

全日本医学生自治会連合（医学連）

第41回定期全国大会

決議

学生自治の取り組みを広げ、 より良い学生生活、医師養成を実現しよう

はじめに

全日本医学生自治会連合（以下、医学連）は、全国民の利益に基づき、医学生の利益を守るため活動しています。そのための交流や連携、情報収集・発信を絶えず行うとともに、全国各地の医学生の自治活動に支えられ、民主的に拡大・発展してきました。

医学連大会は、加盟校の学生はもちろん、より多くの医学生とともに自治会活動について交流したり、医学生を取り巻く状況や医師養成について学んだりしながら意見を出し合い、要求実現の道筋を決定する場です。

2023年度はこれまでの3年間と異なり、COVID-19は2023年5月8日より5類感染症に移行し、私たちの生活の制限が大幅に解放されました。多くの学生にとって学習・課外活動の両方で充実した日々を送ることができたのではないのでしょうか。医学連としても今期は、中央執行委員会会議、自治会交流集会、自治会懇談、全国医学生ゼミナール（以下、医ゼミ）など全ての企画を、原則対面で開催することができました。

この決議は、今年1年間の「全国の学生自治会の取り組みや成果」と「医学連の活動や成果」を振り返ってまとめ、これから1年の活動の基本方針を掲げたものです。この決議の構成は、以下のようになっています。

はじめに	1
【第1章 学生自治会、医学連の意義と魅力】	2
第1節 医学生の願いを集めて実現していく—各地の自治会活動の取り組みから—	2
第2節 全国の学生自治会に共通する切実な願いを実現—医学連の役割と取り組み—	4
【第2章 医学生の切実な要求を実現し、学びがいのある医学部にしよう】	6
第1節 学生の想いと地域医療を両立できる地域枠とは—管理より支援を—	6
第2節 学費値上げ、新修学支援制度に関する活動—学生が平等に学べる場を作ろう—	8
第3節 医学教育への参画と医学教育の適正化に関して—より良い医学教育の実現のために—	9
第4節 医師の過重労働—医療者自身の命と国民の健康を守るために—	11

第5節 学生の一致する要求を伝える活動—医学教育や施設を充実させよう—	13
第6節 全国医学生ゼミナールの成功へ—学生の学びたいという要求の実現を—	13
【第3章 自治会活動、医学連の活動の発展のために】	17
第1節 自治会活動の発展に向けて	17
1. 自治会交流集会	17
第2節 サークル活動、学園祭、学習会、新歓など学生の自主的活動を活発に	19
第3節 自治会の建設・医学連加盟を進め、多くの医学生の要求を実現しよう	20
おわりに	20
全体討論	21

【第1章 学生自治会、医学連の意義と魅力】

第1節 医学生の願いを集めて実現していく—各地の自治会活動の取り組みから—

学生自治会の取り組みは、各大学の状況に応じて多様なあり方、活動の仕方がありますが、学生自治会活動の共通する性質として ①学生の一致する要求で力を合わせる、②規約に基づいた民主的な運営をすることが挙げられます。

1 学生の一致する「要求」で力を合わせる

大学生を送っていると、その中で様々な不満や要望が生じてくることと思います。「特定の学年のカリキュラムが厳しすぎる」「過度なストレスや不安を感じながら授業やテストを受けざるを得ない毎日が続いている」「臨床実習を充実させてほしい」といったカリキュラム上の問題、「老朽化している施設を改修してほしい」「自習室や駐車場を増やしてほしい」「部活動の練習場所がない」といった大学施設の問題、「学費減免制度が突然打ち切られた」「新専門医制度に関する十分な説明がなく不安を感じる」といった全国的な課題などです。

こうした声のうち、学生個人の意見では解決が難しい問題を愚痴で終わらせず、その大学の学生みんなの共通の願いと捉え、実現を目指す組織が学生自治会です。学生自治会は学生一人ひとりの声をアンケート等で広く集め、考えの違いを前提としながらも一致する要求を見出し、医学生の総意として大学側と交渉していきます。このような体制を取ることで、学生全員がより良い大学づくりに参加していくことができます。

信州大学医学部学生会は、授業、施設、学生生活改善のためにアンケートを実施し、その結果を医学生の声として大学へ伝えていきます。令和6年1月に開催された医学部長との懇談会では、多彩な提案が活発に討論されました。例えば、5年生の実習において学務から求められる成果と実際に行われている実習内容の差異が大きく、学務に提出するレポートが書きづらいという不満が多くあがり

ました。これを受け、学部長懇談の際に、提出レポートの書式変更を求め、医学教育の担当教員から前向きな回答を得ることができました。こうした改善が見られる一方で、懇談会外での医学部との連携の不足が、学生の意見を大学運営に効果的に反映する上での課題として挙げられました。この点を改善するため、学生会は医学部とのコミュニケーションを強化し、引き続き学生と大学の架け橋として、学生生活の全般的な向上を目指して活動していきます。

2 規約に基づいた民主的な運営により、大学づくりへの参加ができる

大学の自治とは、大学の全構成員の声を出発点として、より良い大学運営・学生生活を実現していくことです。大学の自治を担っているのは教授会や学務ではありません。「大学の全構成員」とは学生・教員・職員であり、それぞれの立場から大学運営に関わるとするのが本来のあり方です。学生は、学生自治会を通して、大学の自治と運営に参加するという仕組みになっています。

この仕組みの中で学生が大学の自治と運営に参加するために、学生自治会は「全員加盟制」をとっています。また、学生自治会の運営は規約に基づいた民主的な方法によって行われます。役員は選挙によって選出されるほか、学生大会などの議決機関も成立要件が定められており、一部の学生の考えだけでその方針を決定することができないようになっています。こういった手順を踏むことで、学生自治会による意見は全学生の総意として正当性を持つことが認められ、大学運営に関わることができるのです。

島根大学医学部学生自治会では、毎年規約に則り学生大会を開催しています。新型コロナウイルス感染拡大以降はオンデマンド形式で行っています。今年度は6月に、各委員会の説明動画の閲覧と質疑応答を3日間、投票期間を2日間設け実施しました。情報保護の観点から、ポータルサイト「moodle」上に大会の資料や動画、投票・質疑応答フォームを共有する形で行いました。また、動画視聴の工夫として動画内にキーワードを入れて投票の際に記入してもらっています。決議としては、2022年度の決算・監査の承認、2023年度の予算の承認、会計監査委員の選出が行われ、承認されました。しかし、終了ギリギリまで学友会総数の過半数の投票を得られておらず、何度もリマインドが行われました。対面形式だと、学生の参加によって大学の仕組みが作られていると強く感じられますが、オンデマンド形式では学生自治への参加している感覚が薄れてしまい、学生大会自体が軽視される可能性もあります。対面開催より「自治」というものが見えにくくなるという課題をいかに解決していくかが今後の鍵となりそうです。

学生大会では1年間の活動のまとめ、これからの活動方針、予算等について学生全体で確認して決めることができます。一方で、学生大会を開くことは自治会役員にとっても自治活動の本質的な学習になり、民主的な運営を考えるきっかけにもなります。

信州大学、山梨大学、島根大学、山口大学、香川大学、宮崎大学、岡山大学、神戸大学などで学生大会が行われました。大人数での集会が行えない状況下で、通常のやり方で学生大会を開催できない中でも、オンラインツールを活用するなど工夫し、大会を開催した大学が多く見られました。それだけでなく、オンライン開催としたことで気軽に参加しやすくなり、会場の問題が解決されてより多くの参加者を収容できるようになるなど、今後の学生大会の新たな可能性も示唆されました。また、感染対策を検討した上で、対面で実施した大学や、オンラインと対面を併用したハイブリッド形式での学生大会を行った大学もあります。これからも、それぞれの大学の実情や感染拡大状況に沿った学生大会の実施形式を検討していく必要があります。

今後も継続して、またより多くの大学で、医学生が主体性をもって学生大会を開催できるよう、自治会全体でその意義を確認していきましょう。

第2節 全国の学生自治会に共通する切実な願いを実現—医学連の役割と取り組み—

1. 医学生を代表する唯一の全国組織

a. 医学連の役割

医学連は、全国の医学部・医科大学の学生自治組織の全国組織として1984年に結成されました。現在、全国81医学部・医科大学のうち27大学の自治組織が加盟しています。結成以来、医学連はすべての医学生の権利を守り、発展させ、医学生の要求を実現するために活動してきました。医学生の要求は(1)学生の中で実現できる要求、(2)大学側と相談して解決できる要求、(3)国や関係諸組織・団体と交渉することで実現できる全国的な要求、というように大きく三つに分けることができます。最後の三つ目の要求は、学費や奨学金、地域枠制度、卒後臨床研修など全国の医学生の多くに共通する切実な諸課題がそれにあたり、個々の大学での取り組みだけでは解決しきれない切実な課題となっています。医学連は日本で「唯一の」医学部学生自治会の連合体だからこそ、全国の医学生と協力して、国や関係諸組織・団体と交渉することで問題を解決していくアプローチが期待されています。

b. 医学連の取り組み

i. 医学教育学会での発表

医学連は毎年、医学教育学会¹に参加して演題発表を行っています。今年度は、第55回日本医学教育学会大会が7月28日から29日出島メッセ長崎で開催されました。医学連は「医学部カリキュラムに関する学生への全国調査の結果および考察」というタイトルで6分間の発表と2分間の質疑応答を行いました。医学教育に携わる先生にとって重要な問題であったこともあり、本発表で優秀発表賞を受賞することができました。詳細は2章3節を参照してください。



ii. 全国医学生ゼミナールの開催

昨年8月18-20日に大阪公立大学の主管で第66回全国医学生ゼミナール in 大阪が現地開催されました。COVID-19以降、3回に渡ってオンラインでの開催であったため、実に4年ぶりの対面での開催です。参加者は延べ159人へのぼり、大いに盛り上がりました。詳細は2章6節を参照してください。



iii. 自治会交流集会の開催

今期は2023年11月11-12日で高知大学が主管をし自治会交流集会を開催しました。自治会関係者等、38名が参加し、各大学の自治の状況を共有する良い機会になりました。詳細は3章1節を参照してください。

iv. アンケート調査の実施

今期は2023年12月1日より、医学部カリキュラムが心身の健康に与える影響を調査する目的でアンケートを実施しました。現在で回答は55大学2204件（2024年3月13日時点）へのぼり、集められた医学生の声は、医学教育学会での発表や厚生労働省、文部科学省との懇談、メディアでの発信を通じて国や医療業界、各大学などへ届けられます。詳細は2章3節を参照してください。

v. パレスチナ反戦の声明発表

2023年10月7日、パレスチナ・ガザ地区を実効支配するハマスがイスラエルに対して奇襲攻撃を行ったことをきっかけに、ハマスとイスラエルの国防軍による激しい戦闘が開始されました。戦闘は、11月24日より7日間の休戦がありましたが、12月1

¹ 一般社団法人 日本医学教育学会 < Japan Society for Medical Education > <http://jsme.umin.ac.jp/>

日の戦闘再開以降は過激化の一途をたどり、既に、子ども1万人を含んだ3万人以上の市民が犠牲になっており、現在も多くの民間人を含む人々の命が失われています。また、ガザ地区は医療施設やインフラに対しても攻撃を受けており、多くの民間人が人道的危機に瀕しています。

こうした状況を鑑みて、12月28日に医学連中央執行委員会は「イスラエルとパレスチナ・ガザ地区での即時停戦と人道支援を求める声明」を発表しました。医学連は規約で本組織の目的のひとつとして、「平和と民主主義を擁護する」ことを掲げています。声明では、すべての戦争当事者に対する即時停戦を強く求め、尊い人命が保護されることを望み、国際人道法違反である医療施設への攻撃をやめるよう呼びかけ、患者と医療従事者の安全を求める内容となっています。声明はホームページや医学連新聞で公開されています。

vi. 省庁交渉

今期は3月14日に厚労省交渉、3月12日に文科省交渉を行いました。加盟校との懇談やアンケートを通じて学生から吸い上げた要望をもとに、医学教育や医師の労働環境に関する問題を中心に要求などを伝えました。詳細は2章1～5節を参照してください。

vii. 自治会懇談

今期は山口大学、岡山大学、香川大学、滋賀医科大学、和歌山県立医科大学、兵庫医科大学、福岡大学、山梨大学と自治会懇談を行いました。自治会の活動状況や活動する上での困りごと等をヒアリングを行いました。医学連と各地の自治会が密に連携をとっていくことは、個々の大学では実現が難しい医学生の要求を実現する上で重要な取り組みです。詳細は3章1節を参照してください。

viii. 広報

医学連は全国の意見を集約し、様々な媒体や機会を利用してその声を発信しています。また、そこで得られた意見をフィードバックし、さらなる医学連の発展した活動につなげています。医学連新聞、ホームページ、X(旧Twitter)など各種メディアの取材等での発信も行ってきました。

今後も医学連の存在をより身近に感じてもらえるよう、また、医学生の拠り所となれるような広報を続けていきます。

【第2章 医学生の切実な要求を実現し、学びがいのある医学部にしよう】

第1節 学生の想いと地域医療を両立できる地域枠とは—管理より支援を—

1 地域枠に関する情勢

地域枠は、全国的な問題である医師偏在・医師不足対策を主な目的として各大学・自治体で設定された枠組みです。そのため、地域医療を守るために地域医療に従事することを考えている医学生を後押しするものである必要があります。しかし、近年別枠方式への一本化²やマッチングシステムの改定など、地域枠制度の医師確保対策としての側面の強制力が強くなってきており、「地域医療に従事したいと考える医学生を後押しする制度」からかけ離れていくのでは、との懸念があります。また、地域枠には法的拘束力はありません³が、各都道府県等からは、地域枠で入学した学生に対する道義的責任を問うべきとの意見も挙がっています。しかし、高等教育機関である大学が卒後進路を特定の研修病院にのみ限定することは、職業選択の自由および大学設置基準32条（卒業の要件）から、不相当であるとも考えられます。さらに、地域枠学生に対して、入学時にかわした契約内容の変更が卒業時に一方的に伝えられたという事例も医学連に寄せられています⁴。

山梨大学の地域枠制度では、令和2年度入学者から（初期研修に加え）専門研修を県内の指定病院で行うこと、修学資金を返還する場合は年10%の金利を支払うことなどが定められています。それに加え、令和3年度以降の入学者には違約金が設定されるという方針が報道⁵によって明らかになりました。また、5年次の地域枠学生を対象に行われる個別面談などで、結婚や妊娠などライフプラン

² 厚労省と文科省が相談して別枠方式に一本化することが決定した。別枠方式とは、一般の入試と地域枠入試を別にして、地域枠入学生は必ず奨学金を受けるとする方法のこと。

³ 地域枠の従事義務要件は、各自治体が貸与した奨学金の返済免除に対する要件と、大学入学選抜の応募要件として課した義務履行条件（卒後進路指定・奨学金需給指定）に分類することができる。前者は各自治体と個人間の民法契約であり、返済によって従事義務は解消される一方で、後者に関しては、指定研修先や年数の不確定から有効条件を満たさないこと、憲法上の職業選択の自由及び居住移転の自由の観点に抵触することから法的拘束力は発生しないと考えられる。ゆえに、奨学金を返済した場合や奨学金を伴わない場合には、従事義務は法的には解消されると考えられる。

⁴ 宮崎大学では、入学時に契約した内容と異なる従事義務内容を入学後に提示される事例がありました。大学側からは、学生がキャリアを積む上で不利益がないように努めているという意向は伝えられましたが、契約内容が変わる上で学生への説明が不十分だったことや、6年生のマッチング期間には何も説明がなかったことなどから、学生の間で不安が広がっていました。この件に関する学生会のアンケートを元に大学側と懇談を行い、その後は説明会が開催され、法的拘束力がないことの説明がなされるといった成果につながりました。

⁵ 山梨日日新聞『医学部地域枠に違約金』（2020年11月5日）

の立て方を制限するような発言があり不安に思った、との声も挙がっていたことから、地域枠に関する学生の声を集めて適切に行動するため、学生会がアンケート調査を実施しました。質問項目は修学資金の利用状況、説明会・個別面談での説明は十分か、地域医療の学びに関する要望、違約金についてなどで、107件の回答がありました。特に違約金に関しては、その報道を知らない医学生や、違約金制度の詳細について明らかにされていなかったことから問題意識を持っていない学生も多かったようですが、「違約金を定めるよりも、地域で働くことの魅力を伝えられる教育のほうが必要だ」というような声も複数寄せられました。

2 地域枠問題に対する取り組み

医学連は山梨県福祉保健部医務課に「医学部地域枠に関する公開質問状⁶」を提出し、違約金設定に関する具体的な内容や今後の方針について聞き取りを行いました。医務課からの回答では、違約金を設定する必要性について、今年度初めて地域枠医師の義務年限違反者が2名現れたことを受け、地域医療への貢献を確固たるものとするため、との理由が挙げられました。また、違約金の具体的な金額も明らかにされたほか、結婚や介護などの事情による離脱は認めないとの方針も示されました。さらに、医学連は全国医師ユニオン、日本労働弁護団と勉強会を重ね、今回の制度における問題点を確認しました。その上で、この違約金設定が今後全国に波及することを危惧し、また、この違約金設定や地域枠制度全体における「学生を地域に縛り付ける」方向性を是正するために、2021年11月19日厚生労働省記者クラブにて三者合同での記者会見を行いました。

また、島根県の地域枠学生及びその関係者から島根大学医学部の地域枠の運用方法について不安の声が医学連に寄せられ、2022年2月に島根大学と島根県に対して「島根大学医学部地域枠に関する公開質問状」を提出しました。

医学連は「地域枠・地域の医師確保に関する全国調査(2021年度版)」と題して、将来の労働環境に求めるものや地域枠制度・地域の医師確保についてアンケート調査を行いました(回答期間 2021年12月6日～2022年4月1日)。回答は、紙媒体とインターネットで収集し、61 医学部の学生から計2270 件の回答が得られました。

調査項目は、下記のとおりです。

- 地域枠制度、及び地域医療に対する医学生の認識
- 現時点で想定しているキャリアプランや人生設計
- 地域枠制度の利用を検討した際の詳細について

⁶ 医学連HP『医学部地域枠に関する公開質問状を山梨県に提出し、回答をいただきました』<https://www.igakuren.jp/topics/%e6%b4%bb%e5%8b%95%e5%a0%b1%e5%91%8a/750.html>

- 地域枠学生の属性
- 地域枠の学生への特別カリキュラムや学修支援
- 地域枠制度での入学を経た現状への満足度

全国調査の報告書では結語として、「対話の中で作り上げる地域枠へ」という言葉を掲げています。医学連は今後も、地域枠の制度設計に関する議論に医学生・医師を含むより多くの人に関わっていく場が必要だという認識が社会全体に浸透するよう、自ら積極的に対話に参加し情報の発信を行っていきます。

第2節 学費値上げ、新修学支援制度に関する活動—学生が平等に学べる場を作ろう—

1 大学等修学支援法の改正

大学等修学支援法⁷が2019年5月に改正され、2020年度から施行されました。制度内容の変更により、これまでは支援を受けることができていた所得層の家庭の学生が支援を受けられなくなります。さらに、医学部学生で多いと言われる多浪生、留年生、再受験生、編入生が不利益を被る内容でした。「高等教育の修学支援新制度」に関しては、令和6年度より多子世帯や理工農系の中間所得層に支援対象を拡大することが決まっており、学習意欲のある学生への支援は広がってきています。しかし、依然として今回の支援拡大対象とならない中間所得層の家庭は多いと考えられます。

また、2018年から国立大学の学費値上げの動きも続いており、東工大、東京藝術大、千葉大、一橋大、東京医科歯科大が授業料の値上げを表明し実施しました。また、2024年度から東京農工大学も授業料の値上げを決定しています。これらを踏まえて、文科省は授業料自由化の議論を始めています。医学連としては、そもそも現在の高等教育の学費は海外に比べても高く、学生の学びたい要求を実現するためには学費の引き下げが必要であると考えており、このような学費値上げの動きが今後広がっていくことを懸念しています。

2019年には、高等教育無償化プロジェクトFREEが行ったアンケート「学費・奨学金に関する実態調査」に協力しました。このアンケートは学生の学費・奨学金に関する実態を可視化するために行われ、医学連としては全体の回答の約1割を集めました。アンケートからは生活費を稼ぐためにアルバイトを重ね、本分である学業がおろそかになってしまうなどといった切実な声が聞かれました。

⁷ 『大学等における修学の支援に関する法律施行規則の一部を改正する省令等の公布について（令和2年3月6日総合教育政策局長・初等中等教育局長・高等教育局長通知）』 https://www.mext.go.jp/content/20200306-mxt_gakushu_i01-000005496_01.pdf

このような医学生の経済的状況を改善するために、医学連では2019年11月27日に緊急声明⁸を発表し、12月22日には記者会見を行いました。この会見には医学連役員のほかに各地の大学で学費の値下げに対して活動していた学生にも参加してもらい、メディアを通じて社会に発信しました。

東京女子医科大学が2021年度以降の入学生について、6年間の学費を計1200万円以上値上げすることが報じられました。コロナ禍による大学病院の経営悪化の影響などが指摘されていますが、今回の値上げにより東京女子医大は全国の私立医大で2番目に学費の高い大学となります。この値上げに対しても他大学の追随が懸念されており、今後の他大学の動向についても注意深く追っていく必要があります。

2 継続して学費値下げ・給付型奨学金制度の充実を求めよう

新型コロナウイルスが5類に移行してから、もうすぐ一年が経過しようとしています。このウイルスによって私たち学生は、学業面や金銭面に大きな影響を受けました。全国大学生生活協同組合連合会が2022年の10月～11月にかけて実施した、「第58回学生の消費生活に関する実態調査」⁹によると、一人暮らしの学生への仕送り額は、コロナ前よりも少ないものとなっていました。また、アルバイトをしている学生の数も、感染初期よりは回復傾向にありますが、コロナ前のピークには戻っていない状況でした。オンライン授業の増加による通信機器の整備など、学生の出費は増えましたが、収入や仕送りは減少しており、経済状況としてはあまり芳しくない、といった状況が当時考えられました。

現在、奨学金利用は学生の2人に1人¹⁰とされています。一方、世界では高等教育無償化への大きな流れがあります。日本は、無償教育を求める国際人権A規約に批准しています。日本でも免除枠や給付型奨学金の拡充が少しずつ進んできていますが、免除枠や給付型はごく一部の成績優秀な学生に限定されており、これでは施策としては不十分といえます。コロナ禍であるかどうかに関わらず、学生にはまだまだ経済的な不安が付きまとう状況であるということです。

医学連は今後も、学生負担軽減、大学予算の拡充の要求を集め、安心して医学を学べる環境づくりを整備します。そして、大学を臨床医学に限らず研究にも安心して取り組めるような場にしていきます。

⁸ 医学連HP 『【緊急声明】新修学支援制度と学費値上げに関する緊急声明を発表』 <https://www.igakuren.jp/topics/info/338.html>

⁹ 全国大学生生活協同組合連合会「第58回学生生活実態調査 概要報告」2022年 <https://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html>

¹⁰ 日本学生支援機構の学生生活調査によると、2020年で49.6%の大学生が奨学金を受給している。 https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei_chosa/2020.html

第3節 医学教育への参画と医学教育の適正化に関して—より良い医学教育の実現のために—

1 学生の医学教育への参加の現状(学会発表)

医学連は毎年、医学教育学会¹¹に参加して演題発表を行っています。今年度は、第55回日本医学教育学会大会が7月28日から29日に出島メッセ長崎で開催されました。医学連は「医学部カリキュラムに関する学生への全国調査の結果および考察」というタイトルで6分間の発表と2分間の質疑応答を行いました。以下は発表の概要になります。

● アンケート調査の背景

医学教育の成果を高めるためには、教員が学生に一方的に知識を教えるだけでなく、学生自身が解決すべき課題や身につけるべき能力を設定し、そうした目標に向けて主体的に学修することが重要です。2015年に発足した日本医学教育評価機構（JACME）は、医学教育分野別評価を実施し、各医学部にフィードバックを行ってきました。そのような背景のもと、臨床実習時間が長くなり、見学型臨床実習から診療参加型臨床実習への転換が促されつつあります。しかし、学びの基盤となるカリキュラムに関しては、その改善に学生の参画を促す試み（例：カリキュラム委員会への学生参加）はあるものの、未だ学生の参加率は高くありません。また、医学部カリキュラムの特徴として必修科目が多く留年判定が厳しいことが挙げられ、その影響として試験前後などに心身の不調をきたす学生が多くいることが予想されました。

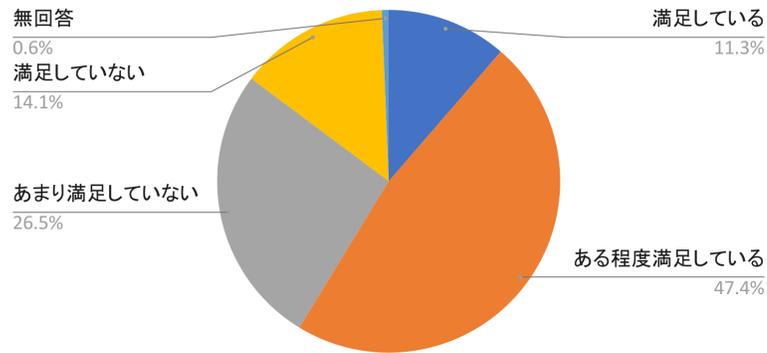
● 「医学部カリキュラムについてのアンケート」調査の結果¹²

調査は「医学部カリキュラムについてのアンケート」という名称で、全国の医学生を対象に2022年12月6日から翌年4月1日まで行い、43大学1252件の回答が得られました。

「カリキュラムに満足している」「ある程度満足している」と回答した方は約58%と半数以上を占めていましたが、満足していない方が全体の4割近くいました（グラフ）。

¹¹ 一般社団法人 日本医学教育学会 <Japan Society for Medical Education> <http://jsme.umin.ac.jp/>

¹² 医学連アンケート調査, 医学教育カリキュラムに関する全国調査 報告書, 2023. <https://www.igakuren.jp/topics/%e6%b4%bb%e5%8b%95%e5%a0%b1%e5%91%8a/1141.html>



(グラフ 1: 所属大学の現行カリキュラムの満足度について (n=1252))

次に、「カリキュラムが原因で健康に影響を及ぼした経験がある」人の割合は70.0%

(876件, n=1252) でした。また、カリキュラム作成に学生が参加することについては、「カリキュラムは大学が作るものだが、学生の意見も参考にされるべきである」との回答が72.2%と最も多い一方で、「カリキュラム改善にとりくむ団体に関わりたくない」「関わりたいか分からない」との回答が72.9%であるということが明らかになりました。

● 医学教育に対する医学連の提言

このような結果を鑑みて、医学連は以下の3点を提言しました。

1. カリキュラム委員会の存在と活動内容の周知の徹底
2. カリキュラム作成に参加しやすい環境づくり
3. 学生の心身のケアの充実

過密化したカリキュラムが学生の心身に不調をきたす一因となっている可能性が示唆される一方で、カリキュラムに問題意識を抱いている学生が多いのにも関わらず、大学側にそうした意見を伝えようとしていない現状も明らかになりました。医学部カリキュラムは、大学から与えられるものではなく、学生と教員の両者でともに作り上げるものであることということを広く周知することが、医学連の大きな役割であることをあらためて認識し、カリキュラムによる学生の心身への負の影響を改善する必要性を確認する機会となりました。

2 カリキュラムが学生生活や学生の心身へ与える影響

2022年度に実施した「医学部カリキュラムについてのアンケート」では上記のように医学部カリキュラムが心身に負の影響を与えている可能性が示唆されました。具体的には以下の通りです。

- 「忙しく十分な睡眠時間を取れないことがある」 35.1% (439件)
- 「時間があっても、眠れないことがある」 は17.2% (215件)

- 「食べられなくなったり、食べ過ぎてしまったりする」が24.5% (306件)
- 「疲れやすくなる」が43.6% (546件)
- 「教員に対して不信感を抱く」が28.4% (355件)
- 「死んでしまいたいと思うことがある」が13.1% (164件)

など睡眠、食欲、対人信頼度といった日常生活およびメンタルヘルスに影響を与え、希死念慮を抱くこともあることが明らかになりました。また自由記述で心身への影響の具体的な経験についての回答を求めたところ、睡眠に関わる記述(72件)が最も多く、次いで不安(32件)やストレス(14件)などの精神面に関わる記述、頭痛や腹痛、蕁麻疹など身体的な症状に影響(52件)が現れたという記述もありました。さらには希死念慮(3件)や自殺企図(4件)などの記述もあり、過密な試験スケジュールや客観性の乏しい成績評価が学生に与えるダメージの大きさを感じさせる結果となりました(表1)。

表1. 心身への影響の原因や具体的な経験(自由記述)の分類

分類	件数
睡眠に関わる記述	72
不安に関わる記述	32
ストレスに関わる記述	14
身体的な症状	52
希死念慮	3
自殺企図	4

医学生のメンタルヘルスに関するこうした結果を踏まえて、日本の医学生集団を対象として医学生のメンタルの不調の状況とその原因を明らかにする必要性が生じました。また、医学生のうつ病罹患率は一般集団より高く、フィードバックの不足や教育の欠如、非支援的風土など医学教育的な事柄が要因として挙げる報告¹³もあります。したがって実情の調査のため今期の医学連アンケートは医

¹³ Dahlin M, Joneborg N, Runeson B. Stress and depression among medical students: a cross-sectional study. *Med Educ.* 2005 Jun;39(6):594-604. doi: 10.1111/j.1365-2929.2005.02176.x.

学部カリキュラムが精神面に与える影響を調査することになりました。アンケートは2023年12月1日より回収を開始し、現在は55大学2204件の回答(3月13日時点)が集まっています。調査結果は41大会後に公開予定です。

第4節 医師の過重労働—医療者自身の命と国民の健康を守るために—

医療現場では、以前から過酷な労働環境の中で医療者の命が危険にさらされてきました。実際に2022年に甲南医療センター（神戸市東灘区）の専攻医が長時間労働が原因で自殺した問題では、労働基準監督署が認定した直前1カ月間の時間外労働が国の精神障害の労災認定基準（160時間）を上回る207時間50分だったことが明らかになりました¹⁴。医師の過重労働を引き起こしている原因として医師の労働者としての権利が守られていない現状があります。このような医師の労働環境では、患者、国民のために最善の医療を行うことはできません。

2024年度から医師の働き方改革が施行されます。具体的には、医師の時間外労働の上限適用や宿日直許可、勤務間インターバルを導入するなど一見、医師の労働環境の改善につながる内容となっているように思えます。

しかし時間外労働時間の上限について、原則年間960時間以下としている一方、地域医療確保に欠かせない機能を持つ医療機関の勤務医や、短期間で集中的に症例経験を積む必要がある研修医や専攻医など労働時間短縮等に限界がある場合には、時間外労働を年間1860時間以下としており、これは脳・心臓疾患の労災認定基準における時間外労働の水準である80時間/月を大きく超えており、時間外労働の規制として不十分と言わざるを得ません。

また労働基準監督署より宿日直許可を受けている医療機関での当直では「問診等による診察（軽度の処置を含む）等、特殊の措置を必要としない軽度の又は短時間の業務」といった「ほとんど労働することのない勤務」に限り、労働時間に換算されないとしており、本質的に医師の労働環境の本質的な改善には寄与する制度ではありません。

¹⁴ 神戸新聞, 「甲南医療センター過労自殺 亡くなった医師の兄、病院の労務改善求め神戸市会で陳述」, 2023/10/18, (<https://www.kobe-np.co.jp/news/society/202310/0016931746.shtml>)

来年度から施行される医師の働き方改革はその他にも不十分な点があり、厚生労働省との懇談において以下のような項目に対して改善を求め、要請を行いました。詳細は厚生労働省懇談報告を参照してください。

- 医師の時間外労働時間について
- 「宿日直許可」制度について
- 勤務間インターバル制度について
- 出産や育児に関する労働環境整備について
- 医学生への情報提供と労働教育について
- 自己研鑽について

医師の健康が担保されなければ、国民に対して安全で質の高い医療を提供することも保障できず、医師のみならず患者さんの健康を守ることもままなりません。地域医療も一部の医師個人の努力に依存するような体制では、崩壊する危険性があるのではないかと懸念します。

医学連は今後も医師の労働環境の改善に向けて、厚生労働省との懇談を含めた活動に力を入れていく方針です。

第5節 学生の一致する要求を伝える活動—医学教育や施設を充実させよう—

多くの学生から、図書館の充実や自習室の設置など、学習・生活環境の向上を求める声があがっています。また、全国の医学部で大量留年が問題視されていますが、留年したあとのフォローアップは十分とは言えない状況にあります。

大学施設や医学教育上の問題は、「学生生活の主体者である学生の要求を伝える」という自治活動の働きによって、大学にも認識され、改善につながっています。これまでなかなか改善されず、変えることは不可能だと思われていたような問題でも、実際には教員側が問題に気づいていない場合や、予算がないなどの理由から長年にわたって放置されているという場合もあります。このような問題については、自治会が学生の代表として懇談の場で意見を伝え、双方の事情をすり合わせてお互いにアイデアを出し合うことで、上記のように解決に向かう場合も少なくありません。自治会として、こうした学生の困りごとを愚痴で終わらせることなく、学生の一致する要求としてまとめることで、改善につなげていきましょう。

第6節 全国医学生ゼミナールの成功へ—学生の学びたいという要求の実現を—

1 全国医学生ゼミナールの成功のために

全国医学生ゼミナール（以下、医ゼミ）は多くの医学生の「より良い医師になりたい、そのために自主的に学びたい」という思いからスタートしました。

「より良い医師になりたい」「自分の興味あることを自由に学びたい」という医学生の要求を実現することも、学生自治会の大切な役割です。そのため、学生自治会の連合体である医学連は、医ゼミを主催し、その開催に責任を持っています。

近年の医ゼミには、全国の医学生だけでなく、看護学生、薬学生など幅広い専攻の医療系学生や教育系や理工系など様々な分野を専攻する学生が集まります。自らテーマを設定して学び、仲間と意見を交わし合うことは、より良い医療・社会を作り上げていく原動力になります。全国のさまざまな大学・学部の学生との交流を通じて、「視野が広がる」「全国に信頼しあえる仲間ができる」「主体的になり、仲間とともに成長できる」などの声が毎年聞かれます。

2 自主ゼミナール活動と自治会を共に発展させよう

医ゼミは単なるサークル活動ではなく、医学生全体の「学びたい」という要求や、開催大学における「自大学で学び交流する場を作りたい」という思いを集約した学術交流企画です。各大学の学生自治会が主管を担う場合でも、全国各地の医ゼミに参加する会が主管を担う場合でも、その地域のより多くの学生の要求に応えられる場として医ゼミを開催する努力が必要です。

過去には、医ゼミを開くことで自治会が発展してきた歴史のある大学も存在します。宮崎大学では60宮崎医ゼミの主管運動において、宮崎大学学生会のメンバーと医学連が「なぜ自治会が医ゼミの主管を行うのか」について深く議論してきたという過程があります。さらに医ゼミ開催後、宮崎の現地実行委員会や自治会交流集会in宮崎に参加した学生が中心となって学生会に合流し、医ゼミの前後で学生会執行委員が8人から25人に増えました。それにより活動の幅が広がり、1年後には学生大会を開くまでに至りました。

3 66大阪医ゼミを対面開催

第66回全国医学生ゼミナール in 大阪は大阪公立大学の主管で8月18日～20日に開催され、本番の参加者は3日間で延べ159名、8月5日～8月16日までの全準期間の参加者は43名でした。COVID-19が5類感染症へ移行したことで、4年ぶりの現地開催が実現しました。

現地実行委員会を担った大阪医ゼミに参加する会「KONAMONs」には、大阪公立大学の学生を中心に、関西医科大学、近畿大学、大阪医科薬科大学の学生が所属しています。KONAMONsは65和歌山医ゼミに参加した学生を中心に2022年秋から主管運動をはじめ、少人数ながら中心メンバーの力量と

熱意が評価され、39期医学連第9回中央執行委員会で大阪公立大学、関西医科大学が主管校¹⁵に決定しました。

4年ぶりの現地開催に向けては、現地実行委員会が中心となり本番会場、全準会場、宿泊施設を予約する等の事務的な準備の他、西成地区でのフィールドワークを設定するなど全準期間での学習機会を増やす等、大阪医ゼミの成功に向けて一丸となって取り組みました。

メイン企画では「誰一人取り残さない医療を目指して～都市部の医療から考える～」をテーマとしました。日本有数の都市部である大阪における貧困問題やコロナ禍での医療崩壊などの事例を取り上げることで、医療アクセスや排除の問題について学習し、皆が適切に医療にアクセスすることができる社会について考えました。

平和企画では「人権の終わりなき追求～誰もが自分らしく生きるために～」をテーマとしました。大阪に見られる在日外国人や日雇い労働者などのマイノリティーで、社会的、経済的に弱い立場に置かれている人々の境遇についての関心を出発点に「人権とは何か」という問いを考え、事例のみならず、広く人権に関係するテーマを扱い、人権の意義について考えました。

おおい町国民健康保険名田庄診療所の所長をされている医師の中村伸一先生のご講演では「地域に“寄りそ医” 30年 ～人生で大切なことはすべて地域から学んだ～」というテーマでお話しいただき、長年地域医療に従事され、地域の専門医と言えるようになった中村先生ご自身の経験談を踏まえ、限られた医療資源でも、地域でできることは何か考えました。

数学者、大道芸人のピーター フランクル先生のご講演では、国際人であるかどうかは、言語能力より心の寛容さ、つまり他人や他文化への態度によって決まると教わり、真の国際人のあり方について考えました。

66大阪医ゼミは、現地メンバーと全国実行委員とのコミュニケーションが円滑であったことが成功の最大の要因であったと思います。大阪での開催は医ゼミ史上初であったことや4年ぶりの現地開催ということで、事務的な仕事は過去3年間よりも大幅に増え、学習面でもスケジュール感がオンラインと異なることによる困難がありました。そんな中でも現地メンバーと全国実行委員では週に一

¹⁵しかしその後、関西医科大学が主管を辞退しました。主管運動では、学生の総意と主管運動に前向きな教員の承認を得ることができましたが、大学関係者の協力を得ることができず、自治会としても主管継続は困難と考え、このような結果になりました。主管辞退は医ゼミの歴史上初めてのことであり、全国実委や現地の学生の努力によって主管の3要件を満たしたにもかかわらず、大学側から主管の協力を得られないというのは極めて遺憾です。一方で、主管の3要件の一つである「大学の協力」に関して、主管運動での詰めが甘かった点は否めません。というのも、学生部長の立場にある教員から口頭での承認を得るのみで書面上での主管運動の承認を得ることや医学部長や理事長の承認を得ることはしなかったからです。しかし、私立大学特有の事情に左右された部分もあり、主管辞退を事前に予測することは困難であり、今後の67医ゼミ以降の主管運動に向けて教訓にしたい経験です。

回のチームミーティングで情報共有を行うことで、十全にコミュニケーションをとり、協力し、乗り越えることができました。この経験を受け、対面の医ゼミを知らない学生が大半を占める全国実行委員の中で、対面の医ゼミを運営する際の全国と現地との連携の重要性を身をもって認識することができました。

また66大阪医ゼミを経て、KONAMONsは、安定的に定例会を開くことができるようになり、全国企画にも継続的に参加してくれる医ゼミサークルに成長しました。前年度の65和歌山医ゼミに引き続き、関西地域で医ゼミが開催されたことで、同地域での自主ゼミ活動が今後も盛り上がるのが期待されます。

一方医ゼミの主管を担うにあたって、三要件の一つである「学生の総意」の重要性が改めて強調される必要があります。本来は自治会を有する医学部で、学生大会により医ゼミの主管が可決されることが望ましいですが、65和歌山医ゼミ以降は学生大会での採決ではなく、アンケートの結果を「学生の総意」とみなすという形で主管運動が進められています。医療系学生の学びの場である医ゼミを民主的な形で進めるために、自治会の連合体としての医学連が必要とされた、という歴史的経緯に今一度立ち戻る必要があると思います。

4 各地で自主ゼミサークルの活動が活性化

66医ゼミの主管校決定の際、大阪での開催は学生の参加者が減少しつつある関西や西日本での医ゼミ活動を再活性化することのできる絶好の機会であると同時に、医ゼミ開催の経験のない他の全国のサークル・団体の今後の活動の励みになり、更なる医ゼミの発展につながっていくことが期待されました。

実際に、本番後には大阪医ゼミ参加者が中心となり、医ゼミサークルを発足させています。それぞれの地域で、医ゼミの熱が冷めやらず、仲間を増やす団体がたくさん現れています。

福岡県から医ゼミ本番に参加した学生は、主管校立候補を契機に「一緒に医ゼミに行くメンバーを広げたい」という思いが高まり、サークル発足に向けて全国実行委員会と相談を重ねてきました。その後、12月に久留米大学の学生を中心にサークル「Ümes（うめず）」が発足しました。久留米大学内でサークルに参加するメンバーを募り、月に1回の学習会、サークルの公認に向けた手続きに取り組んでいます。また、財政確保のためのカンパ活動を行い、新歓に向けて新規メンバー獲得の準備を進めています。

兵庫県では、神戸大学と兵庫医科大学の学生が医ゼミの全準・本番に参加し、学生自治会と

も協力して10月にサークル「みなとんず」が結成されました。医療系学生6名が集まり、自主的に2ヶ月に一回ほどの勉強会・ミーティングを開催しています。医ゼミに行く仲間を集め、夏に向けて団体を盛り上げていく意気込みが語られています。

神奈川県では、「神奈川医ゼミに行く会(かもめの会)」が以前からありましたが、ここ数年はメンバーを集めることができず停止していました。大阪医ゼミを契機に、参加者から再度結成の呼びかけが行われ、11月に活動を始めました。メンバーは16名が集まり、毎月の定例会、交流会や勉強会の開催、スプリング医ゼミに参加する計画を立てています。対面活動を積極的に取り入れ、各々がやりたいことを実現したり、新たな興味を見つけたりする事ができる場として広がってきています。

また、既存の医ゼミサークルでも医ゼミの振り返りの学習を行ったり、自分の地域での学習成果を発表するためにプレ・ポスト医ゼミを企画したりと、医ゼミ本番をきっかけに全国に医ゼミの魅力が波及していきました。

どの地域でも、医ゼミ本番・準備期間に実際に参加した学生が魅力を感じ、周囲の学生とともに活動を継続したい、もっと発展させたいという思いが大きな推進力を発揮しています。また、参加する学生からも学ぶ熱意、医ゼミと一緒にいく仲間を広げたいという思いが語られ、各大学での自主ゼミサークル結成・活性化に協力の輪が広がっています。医ゼミ全国実行委員会および医学連役員は、今後も各地域の参加者と結びつき、サークルの活性化や医ゼミ参加に向けての活動を応援していきます。

5 第67回弘前医ゼミを成功させよう

今年で67回目を迎える医ゼミは、歴史と伝統を脈々と受け継ぎ発展を続けてきました。現在でも学生の手だけで運営している学術文化企画としては国内で最大規模のものです。医学連では医学生の学ぶ要求を実現するために、医ゼミの開催に責任を持つ立場として「自主ゼミナール」の場を提供しています。

2024年は、弘前大学が主管校を担うことが決定しました。弘前医ゼミに参加する会「HIZSK」には、主に弘前大学の医学生とコメディカルの学生が参加しています。66大阪医ゼミには12人のメンバーが参加し、全国準備期間から本番運営やレポート執筆などに精力的に関わりました。また、その後の準備委員会には他のメンバーも参加するなど、盛り上がりを見せています。

社会の変遷とともにその時々合った形に変化しながら、思想や信条の違いを超えて多くの学生の思いが詰まった企画として発展してきたのがこれまでの医ゼミです。今年の大阪医ゼミを通して更に全国に学びの輪が広がり、医療系学生の学びの場としてこれからも医ゼミが受け継がれていくよう全国実行委員会としても全力を尽くしていきます。

【第3章 自治会活動、医学連の活動の発展のために】

第1節 自治会活動の発展に向けて

自治会活動を活発にしてこそ、要求実現の推進力が強まり、私たちの願いが実現することにつながります。自治会活動を発展させていくための取り組みは、毎年継続している活動を絶やさず行っていくことと、学生の願いに基づいた新しい活動に取り組むことの2つの側面で考えることができます。

1 アンケートなどで声を集める活動が学生自治の出発点になる

大学側に要望を伝えるだけでなく、それに対する回答や成果についてフィードバックを行うことで、「自分も自治や医学教育に参画しているんだ」と気づいてもらうことが重要です。弘前大学医学部学生自治会では「M. I. C.¹⁶広報」を定期的に発行し、アンケートの結果や教授懇談で伝えた内容とそれに対する回答などを掲載しています。ほかにも宮崎大学学生会では学生会新聞「ひぼまゆえ」を、信州大学学生会では「学生会のおたより」を定期的に発行し、活動を学内に広める活動を積極的に行っています。自治会が学生の要求実現に向けて取り組んでいる組織だと認知されることで、より意見が集まりやすくなり、学生の総意を大学側に伝えることができる、というように、正の循環が生まれていくのです。

2 自治会活動のやりがい、悩みを交流しよう

各大学の自治会が毎年行っている活動は、他大学の学生自治会と交流することで、自大学の中では気づけないその重要性に気づくことができます。また、医学連役員との交流の中で、全国的な課題の解決へとつながることもあります。

3. 自治会交流集会

医学連は、自治会交流集会を通じて全国の自治会の情報共有や交流の場を作っています。自治会同士が活動を報告しあうことで「自分の大学でもやってみよう」と自分たちの自治活動のモチベーションがあがったり、お互いの活動の悩みを相談することで「自分たちと同じ悩みを持っている自治会と話せて安心した」「ほかの大学での成功体験を聞いて解決していく糸口が見つけられた」と、自分たちの活動と他大学の活動を照らし合わせて情報共有できたりします。

今期は2023年11月11日、12日に高知大学岡豊キャンパスで「自治会交流集会 in 高知」を開催しました。全国から対面会場に38名が参加しました。

¹⁶ M.I.C.とはMedical Information Committeeの略で弘前大学医学部学生自治会の通称

自治会取り組み紹介では全国各地で自治活動をしている団体(高知大学、宮崎大学、京都府立医科大学、国際医療福祉大学)の代表者が、各地の活動内容を発表しました。それぞれの大学内で、自習室や留学、授業のコース選択など、特色ある取り組みによって学生生活が改善されていることがわかりました。

また、一定時間ごとにテーブルを変えてチームで新しいアイデアや解決策を考える「ワールドカフェ」を行いました。今回のお題は「学生自治会の活動に関する『悩みあるある』」とし、学生自治会として取り組むアイデアを出し合いました。認知度向上のための広報、執行部メンバーの集め方、企画の作り方、会費の使用方法など様々な話題が出ました。

講演会では、「今のままで良いのか？日本の医学教育！昭和大学医学部における学修者本位の教育」と題して昭和大学医学医学教育学講座の教授である泉美貴先生にアクティブラーニングの必要性や昭和大学カリキュラムにおける実践について解説していただきました。参加者からは「低学年からの病院での実習が魅力的で、自分の大学との差を感じた」という昭和大学のカリキュラムに対する意見がでた他、「これまでの医学教育にとられない改革が必要で、学生の力で実現できうということを知り、勇気とモチベーションが生まれた」という医学教育のカリキュラム作成への学生参加の可能性について声が上がりました。

4. 自治会懇談

医学連は、各大学の自治会・代表者組織との懇談を定期的に行っています。各大学で困っていることを相談したり、他大学で行っていることを共有して参考にしてもらったり、医学連の取り組みを紹介して交流を深める機会としています。また、医学連役員も含め自治会のメンバー同士がそれぞれの活動から学び合う場にもなり、複数自治会合同懇談なども呼びかけています。自治会だけでなく、「自治会を作りたい！」という学生・大学にも積極的に赴き、ノウハウなどの支援を行っています。

今期は対面またはオンラインで懇談を実施しました。岡山大学、香川大学、山口大学、滋賀医科大学、和歌山県立医科大学、兵庫医科大学、福岡大学、山梨大学の8大学と自治会懇談を行い、愛媛大学、鹿児島大学、奈良県立医科大学、福島県立医科大学の4大学の学生と懇談を行いました。自治会懇談では、自治会活動の状況や困りごとを医学連と共有し、自治会あるいは医学連として取り組む問題について考えます。自治会がない大学の学生との懇談においても、学生生活における困りごとを聞き取ったり、学生の声が大学に伝わるシステムがあるかどうかなどの情報は医学連の今後の活動を考える上で有用であり、医学連の活動を通して状況の改善が見込めれば、学生の利益にもなります。

岡山大学においては人材不足の状況の中でも、実質的な医学部自治会である「評価改善ユニット」が定期的な会議を実施し、学生からの意見を収集して改善に取り組み、しっかりと活動を行ってい

ます。毎年、新たな工夫を凝らした取り組みが行われ、その活動は他の大学にも参考にされるほどです。2022年に医学連に加盟したにもかかわらず、医学連が十分なサポートを提供できなかった点は、医学連自身が反省すべき課題です。岡山大学の自治会メンバーの中には、医学連役員経験のある方もいるため、岡山大学の課題解決に向けて、医学連も積極的に協力できるよう、定期的に情報交換を行い、来年度も対面での懇談を実施したいと考えています。岡山大学とのより一層の強固な関係構築を目指しています。

愛媛大学は自治会は設置されていませんが、学年代表や試験対策委員を選出し、学生の意見を大学側へ伝えたり、試験日程の調整や試験情報の共有など役割分担がなされています。カリキュラムや施設に関しては、問題が生じた場合には学年代表を通じて大学側へ学生の声を届けることができるため、特に不満のある学生はいないのではないかとのことでした。実習に関しては、終了時間が夜遅いことが課題として挙げられました。また、カリキュラム委員会が学生間であまり認知されておらず、カリキュラム作成への学生への参画には、認知度の向上がこれから必要です。最後は、懇談を通して愛媛大学と医学連の交流を活発にしていけることを目標としました。

全国の医学生の利益のために、今後も交流が途絶えることのないよう懇談や日頃の連絡を継続していく予定です。

第2節 サークル活動、学園祭、学習会、新歓など学生の自主的活動を活発に

1. サークル活動の発展、新歓、学園祭や医学展の成功を

サークル活動や学園祭など、学生の自主的な活動が活発に行える環境を整えることも自治活動の重要な課題です。このような活動は、学生同士が結びつき人間関係を築いていくことにもつながります。また、将来医師になったときに大切な社会性や主体性を身につけることもできます。学生自治会がサークル予算を決定したり、学園祭の運営に関わったりしている大学も多くあります。

コロナ禍により、2023年度以前、多くの大学で大規模な勧誘活動が行えなかったり、学園祭も中止されたりと、学生による自主的な活動が著しく制限されてきました。こうした学生の活動が制限されてきたことで、活動のノウハウが上手く引き継がれず今後の活動の継続が難しくなるといった事態も生じてきています。こうした新入生歓迎の企画や学園祭などの活動方針を決めるため先頭に立って話を進めたり、引き継ぎを適切に行うといった役割を果たしていくことは、自治会としての重要な責務ではないでしょうか。

2. 新入生歓迎の取り組みの成功を

新入生歓迎の取り組みは、期待と不安をもって大学に入学してくる新入生に対して学生生活のスタートをサポートするものであり、人間関係作りの基盤にもなります。また上級生にとっても、新入生を迎えて人員確保をするという意味合いはもちろんのこと、自分たちの成長においても良い刺激となるものです。

弘前大学医学部学生自治会（M. I. C）は、新入生から毎年、最低3人をM. I. Cに選出してもらっています。また、毎年4月に行われる医学科の「大勧誘会」に参加し、新入生に活動紹介を行っています。また、自治会役員の一部は、弘前医ゼミに参加する会（HIZSK）に所属しており、医ゼミの現地運営も担います。弘前は来年医ゼミの主管校となるので、HIZSKとしても大勧誘会の参加や学習会のリレーを行うとともに、他学部や他校にも広報やキャラバンを企画しています。M. I. CとHIZSKで協力しながら、さらに活発な活動を目指します。

新入生には学生自治会への参加を呼びかける働きかけも大切です。学生自治会の役割や成果などをわかりやすく伝えクラス委員などの役員の確立を図りましょう。新入生を迎え入れることは学生自治会の発展や存続のためにとても重要なことです。各大学の新歓の取り組みを交流し、全国的に活動を盛り上げていきましょう。

医学連は毎年「医学連新聞」新歓特別号を発行しており、新入生に自治の重要性や魅力を伝える内容となっています。新入生を自治会活動へ迎えるためにぜひ役立ててください。

第3節 自治会の建設・医学連加盟を進め、多くの医学生の要求を実現しよう

1. 新しい自治会の立ち上げ、民主的で継続的な活動、自治の必要性が全国に広がっている

この1年間で、新しく自治会を立ち上げようとする動き、民主的な運営を目指して活動を広げている大学が出てきています。

京都府立医科大学は、医学科でのみ昨年度まで自治会が存在していました。しかし看護学科大学当局との繋がりが複雑であり、部活動との連携が取れていないという現状を踏まえ、今年度新しく全学学生自治会を設立させ、運営体制を立て直しました。その際、すでに存在していた医学科自治会の規約を改正しました。新体制では、2,3ヶ月に1度定例会議を行うなど、継続的な活動ができています。今年度は、女性用トイレへの生理用品設置や新入生の集いの開催、部活説明会の開催、学祭の開催、部活動間の問題解決などを行いました。学生の意見を幅広く取り入れた活動をしています。今後は他大学医学部学生自治会との交流の活性化など全学学生自治会のさらなる発展を志すようです。なお、医学連加盟については1月の定例会議にて議題に上がり、今後検討していくこととなりました。

国際医療福祉大学は医学科新設から今年で7年目となります。自治会としては、医学科の学生による「学生委員会」と他6つの学科と合同で構成された「学生会」がそれぞれの役割を果たしています。特色あるカリキュラムの一方で、新設校ならではの施設面の課題や引き継ぎの難しさを抱えていますが、医学連と交流を継続してきた中で様々な大学の自治活動を参考にして取り組みを加速させています。今年度は、大学との意見交換のほか、広報局の設置、情報誌の作成、LINEのオープンチャットを用いた匿名意見箱・質問箱の開設、学生の交流企画の開催（新入生ウェルカムパーティー、ハロウィンパーティー、全学科の学生と教員も参加のドッジビー大会）など、様々な取り組みを行ってきました。今後も機能的な自治会の体制構築を図っていくとともに、医学連との継続的な交流のもとに加盟の機運の高まりが期待されます。

おわりに

学生自治会・医学連では、「自分の大学をより良くしたい」「より良い環境で学びたい」「自分たちの受ける医学教育・卒後研修や労働環境について考えたい」といったすべての医学生の要求を実現することを目指して様々な活動を行っています。それらの医学生の要求を実現することは、「より良い医師になってほしい」「安心してより良い医療を受けたい」という国民・患者さんの願いにも結びついてきます。こうした国民・患者さんの求める「より良い医師」を目指すためにも、一人ひとりが力を合わせ、少しずつ要求実現を進めながら学びがいのある医学部をつくっていきましょう。そのためには、大学の教員と職員、学生が一丸となり、医学教育・大学づくりに取り組んでいく必要があります。その際に学生自治会は学生の声を届けるための重要な役割を担っています。よりよい学生生活を求める学生の声は連鎖的に全国へと広がり、最終的には医療界全体にも良い影響をもたらすでしょう。より多くの悩みを抱える学生時代だからこそ、全国の仲間と力を合わせて各地の自治活動を盛り上げ、よりよい学生生活の実現のために一緒に取り組んでいきましょう。

全体討論

代議員 香川大学

今大会に参加して、医学連の活動内容や各大学の学生会の働きなどが我々の学生生活の改善にどれだけ大きな影響があったのかを学べてすごくいい機会になったと思っています。今回はありがとうございました。

役員 高知大学

医学連大会の感想と医学連の来期についてお話しさせていただこうと思います。今回の医学連大会では様々な大学の取り組み紹介や自分達がやってきた医学連の活動、取り組みといったものを振り返るいい機会になったと思います。自分の関わったことを振り返ることができ、今年の反省や来年に向けてどうしていきたいかを整理できたと思います。今年の医学連大会でわかった反省等を活かして、今後も皆さんの学生生活のために努力していきたいと思っています。

代議員 島根大学

対面で今大会に参加して、自分の知識が足りないというを感じたので、医学生のことを考えた上でいろんな面で勉強を進めて行かなければならないと思いました。

自分が医学部という環境において勉強という分野で勉強不足であることを実感しました。来期から中央執行委員に立候補しようと思っています。学生と医学連の橋渡しのような存在になれたらと思います。島根大学は、自治としては発展している方なので、島根大学で培った知識を活かして、自治会を良くしていきたい、自治会を始めたいという学校の手助けになりたいと思っています。個人的に医学連で話してみたいことは、医学生のキャリア形成に関する話です。医者としてやるべきことが増えていると思うのと、医学生の中にも入学してから医師の適性が無いことに気づく人がいるのではないかと思います。そういう人が新しいキャリアをどうやって作っていくかについても考えてみるとおもしろいかと思います。

代議員 高知大学

今大会で、他大学とのコミュニケーションや学習を通して学校で学ぶこと以外のことも学べました。エスカレーター方式とは違う環境に身を置けるのはいいことだと思いました。また、講演会や医師増員の感想ですが、学校の授業だけでは学べない社会情勢も学べていい機会になりました。ありがとうございました。

代議員 島根大学

今回医学連大会に初めて参加しました。他の学生自治会ではSNSなどNotionなど最新の機能を使っていることがわかりました。島根大学でもぜひ取り組んでいきたいと思っています。Notionの使い方がわからなかったのが誰かに教えてもらって帰りたいです。医学生として、社会情勢であったり医学に関係のない事でも積極的に勉強をして視野を広げた医者になれるようにしたいです。

代議員 弘前大学

今回初めて医学連大会に対面で参加しました。対面の方が受け取る情報の質が高いなど感じる3日間でした。目立った活動はないが、Notionを活用してこれからの弘前大学の自治会の基礎固めをする1年をしたいと考えています。3日間ありがとうございました。

オブザーバー 高知大学

感想ですが、自治会の集まりにあまり参加したことがなくて話す内容やコミュニケーションに自信がなかったが、皆さんにすごく助けていただいて、たくさん学ぶこともあり、とてもいい機会でした。高知大学は看護学科も含めた自治会になっていて、看護学科の実習は厳しいと聞いています。パワハラ、モラハラまがいが起きているということを知ることがあるので、医学連に対して期待することは、文科省、厚労省への交渉の機会があるなら、ぜひ医学連で取り上げてほしいのではないかと思います。

代議員 高知大学

今回の感想といたしまして、参加者みなさんとSGDを通して、思うことや自治会の状況などの意見交換することができ、このような機会はとても貴重だと思いました。いつも刺激を貰っていて、今後の自治会活動の励みになればと思っています。41期の展望につきまして、医学連は、1つの大学ではできないことを代表して、学生の総意を届けるという使命があり、医学連しかそのような団体がないというのは明らかです。来期は中央執行委員に立候補するつもりです。来期も更に交渉に参加するなどして、医学生全体の利益になるような活動を主に頑張っていきたいと考えています。よろしく願いいたします。

代議員 島根大学

まず、今期の振り返りということで、今期は後期に主に力をいれて活動しました。省庁交渉などの活動の中で、医学生の声拾い上げて、いかに医学生の声届けるかということに注力してきました。いろいろ協力してくれてありがとうございます。来期の展望については、今期の加盟校との距離を縮めようという取り組みは継続しつつ、各大学との交流を深めて、さらに加盟校同士のつながりを強めたいと思っています。また、今医学連に興味を持ってくださっている未加盟校の方々とも距離を縮めたいとも考えており、さらに医学生の声拾い上げることのできる体制を作っていきたいと思っています。来期は中央執行委員に立候補して頑張りたいと思っています。たくさん交流していただきありがとうございました。

代議員 信州大学

今回医学連大会に初めて参加しました。三日間の感想としては、皆さんの自治会取り組み紹介などを聞いて自治会活動に対してさらに意欲が高まりました。来期の抱負ですが、これまでの活動の中で、文科省交渉に伺わせてもらったりする中で、医学連というものが国に通して声を届けられるというところで存在意義の大きさを感じました。来期は中央執行委員会として活動したいと考えています。今まで以上により一層医学連の活動に尽力していければと思っています。

代議員 弘前大学

医学連大会に参加しての感想を述べます。各大学の取り組みや悩みに共通点があったり、自分たちが参考にできる部分があったり、すごく学びになるような大会でした。ディスカッションなどを通じて、価値観や知見を広げられました。医学連や自治会の活動の展望として、今回感じたのは、様々な問題に対応していくにも事前知識を得たり各大学の自治会の取り組みを理解しているとさらに広角的に活動していけると感じました。私は中央執行委員に立候補したいと考えています。医学連での活動を通じて、各大学同士の交流を広げ、しっかりとつなげられるように努力していきたいと考えています。その事前知識を得られる場として、全日本医学生ゼミナールがありますが、今回の開催は弘前ですので、現地のメンバーとして動いていけるように頑張りたいです。これからもよろしくお願いします。

役員 香川大学

今現在、中央執行委員を務めていますが、来年は書記局員としてサポートしていきたいと考えています。先ほどまでの若い方の意見を聞いて、とても理解しているのだなと感じて、安心しています。

代議員 和歌山県立医科大学

今回が初めての参加で、学校で学べないことや他大学の活動について学べてよかったです。その反面、自分自身には知識が足りないなと強く感じました。周りの発表を聞いて、いつか前にたって発表してみたいと思いました。働き方改革について興味があったので、医療だけではなくいろいろ調べて発表したいと思いました。

役員 弘前大学

自分は1年の時から医学連活動に関わってきました。医学連を通して沢山の事を学びました。自分の大学だけでは経験できないことや、全国の仲間と協力していくことの大切さ、考え方の指標など数多くのことを学びました。医学連の活動に興味を持てたら、ぜひ関わってほしいと思います。

役員 信州大学 今期医学連中央執行委員長

医学連加盟校は27大学あります。加盟しているという事実を、いい意味でも悪い意味でも惰性的にでも、加盟のメリットを活かし続けてほしいと思います。代議員の派遣や加盟分担金など、負担に感じる大学もある。みんなで協力するために必要なことがあります。

昨今皆人手不足で、それを理由に加盟し続けるのが難しいという大学がいくつかありました。どこの大学でも人手不足な中、厳しいところもありましたが、惰性的でもいいから、自分としては、医学連に残留し続けてほしいと思います。

自治会の活動というのは、給料が出るわけでも先生からほめられるわけでもありませんが、モチベーションはなにかというと、参加することでやる気が出てきたり、活動を通してやりがいを見つけたり、経験を共にする事でこの人と仕事がしたいという気持ちが芽生えたり。そういう人が、現段階でいないとしても、どこの大学でも100人いれば3人ぐらいい興味ある人が出てくると思うので、そこで医学連と関わることができれば、医学連加盟の意義がその大学にとって大きなメリットが感じられる状況になると思います。加盟分担金は大変ですが、今の大学の自治の状況が厳しいとしても、加盟し続けて連絡、コミュニケーションを取り続けることが大事なので、ぜひ残留し続けてください。

医学連としては加盟のメリットを感じてもらえるような取り組みをしていくので、これからもよろしくお願ひします。

役員 信州大学

皆さんは医学連大会に来て、自治活動を自大学でして何を感じるでしょうか。この大会中にもいろんな相談事がありました。そうした声を大会中に聞かせてくれて、交流してくれたことをとても嬉しく思います。

医学連は、結成40年を迎えました。1984年から続いています。40年前から今日の状況はかなり異なります。学生運動というものをやっていたころ、学生運動が盛り上がっていた時代、むしろその逆ですね。学生の主体性がないと言われる、こうした自治活動に関わっていることが珍しいと言われる世代。そうした中で、皆さんが各大学で地道に自治の活動を頑張っているのはとても重要なことで、たくさんの希望が寄せられてるんじゃないかなと思います。まずは、みなさんの努力に敬意を表したいと思います。

先ほど委員長の方から加盟校の取り組みというところで話がありましたが、私は同じような気持ちを抱いています。加盟しているみんなが頼ってくれる、加盟校の助けになれるような活動をしていきたいです。また、各大学の自治活動を守って、医学連自体も大きくなれるような活動をしていきたいです。

私は長きに渡り中央執行委員を務めました。途中一年間は海外で留学をしながら、関わるという活動をしました。本当にその中で中央執行委員や周りの自治会役員に助けられたと思います。この場をお借りして感謝を申し上げたいと思います。

今回の医学連大会を迎えるに当たって、この1年間の取り組みがどうだったか振り返ってみました。数え上げると医学連の活動は、ものすごい量の活動をやっていまして、毎週各チームに分かれてチーム会議、各チームに分かれて企画事、中央執行委員会の会議とか、三役会議とか全てを合わせると1年間で20回ぐらいの会議をやっていきます。一回当たりの会議は、1時間や2時間ですが、それぐらい1年間をとおして誰かが動き回っています。数だけ聞いても、中身を見ても簡単なものではないです。とても大変なものだと思うし、それを役員ひとりひとりが頑張ってくれているなど実感しています。一方で、それがやりがいのあるもので、同時に楽しさもそれを上回ってくるのかなと思っています。それは、仲間と支えあって作っていつているものだからこそだと思います。

今後私は引退の時期を迎えて、後輩にバトンタッチする時期になります。ぜひこの大変なお仕事をみんなの協力と楽しさで乗り切って行って欲しいと思っています。各大学の自治会役員の皆さんも中執役員や書記局となって活動してくれると嬉しいし、定期的に懇談や連絡を取ってもらっただけでもすごく助かります。医学連のことに興味を持ってもらう、大学内で紹介してもらっただけでもとても大きな力になります。加盟校のメリットを活かして、頑張っていき一緒に歩んでいきたいと思っています。ありがとうございました。

オブザーバー 徳島大学

今期の振り返りと来期の抱負を言いたいと思います。今期は、僕はオブザーバーという、自治会のない大学からきていて、自治活動をあまり知らないけど医学連に参加しています。医学連の中でも元々医ゼミの活動が好きでやっています。僕は結構医ゼミの活動が好きで、夏の医ゼミは特に面白かったです。準備も頑張りました。

準備委員会にも参加しましたが、オンラインも多くやってきて、夏の本番は対面開催が決定して、

これはコロナ禍以来初とのことで、当初どうなるかと思いましたが成功して良かったです。皆の力は流石だなと思いました。夏の医ゼミを追い込み過ぎて医ゼミ後、顔が死んでるとかよく言われましたが、追い込み過ぎないようなバランスを考えていく必要があったのかなと思いました。他の仕事の振り返りとしては、両立の難しさを感じていて、大変だと思っていました。

今期の医学連の他の仕事の振り返りとしたら、地元の活動と全国の活動を両立するのは難しいなと、大変だと思っていました。めんどくさいなと思いながら仕事をすることもありました。

来期の目標については具体化できていないのもっと掘り下げて考えたいのですが、あえてこの場で抱負を語るとすれば、第1は楽しくやりたいと思います。色んな意義について他役員も発言され、そこに繋がる事でもあり、シンプルにそういう充実感があってこそだと思いますが、楽しくやりたいと思います。私は今年から高学年になるので、後輩が入ってきたときに引っ張り、支える立場になりたいと思います。

地元の自治活動では、学年代表が教授懇談などを行う等がありますが、盛んではないのが自分の中でもやもやしているポイントです。そこに何か関わる手段をもって臨んでいきたいと思います。